



講師の話を真剣に聞き込む参加者ら = 大垣市輪中館（同市入方）

『輪中は生きている！』

輪中の存在意義を見つめなおす講座開催・大垣

- 公益財団法人大垣市文化事業団は1月24日（土）、同市入方の大垣市輪中館で「輪中堤切り割りの変遷」と題した輪中講座を開いた。平成5年から開催される恒例の講座で、今回は元高校教諭で、現在、岐阜県文化財保護協会副会長を務める馬淵^{まぶち}旻修^{あきのぶ}さん（68）が講師を務め、市内外から約80人が参加、輪中文化の歴史に理解を深めた。

水害から守るため、集落や耕地の周囲を堤防で囲んだ堤防を輪中堤と言い、かつて明治期には、木曾三川下流部に大小合わせて80箇所を数えていたが、現在は僅かしか残されていない。また、残された輪中堤も、防災用の門扉（陸閘）を備えた切り割りへと変化していった。

この変遷について、写真や図表を用いて分かりやすく解説した馬淵さんは「明治時代に入って木曾三川は大規模な治水工事が進められ水害は大きく激減し、輪中の必要性は薄くなっていった。

逆に道路交通に支障をきたすとして多くが削り取られたり壊されてきた」と語り、「地球温暖化によるゲリラ豪雨など、想定外の集中豪雨が多発する現代だからこそ、この地に伝わる特有の輪中文化から学ぶべきものも多い」と輪中堤の存在意義を強調した。

そして、最後に輪中を登録文化財とすることの期待を示した。



輪中堤と切り割り = 輪之内町十連坊